

ままかかった旅人で、トボサクというものが、八人前も食べたので、八千年も生きたというものである。この「ふけずの貝」というのは、実は「九穴の貝」にあたるもので、またトボサクというのは、実は「東方朔」にあたるものであった。奥羽地方の旧家では、しばしば『東方朔秘伝置文』という写本をもっていた。たとえば、花巻方面の農民は、小正月の夜にそのような旧家に行って、この『置文』でその年の運勢をみてもらったという(『東北の民俗』)。そういうわけで、この地方の農民ならば、いちおう「東方朔」という人名を知っていたはずである。それに対して、奥羽以外の地方では、この「東方朔」という名よりも、むしろ「八百比丘尼」という名をもって、やはり不老長生のことが伝えられていた。高橋晴美氏の「八百比丘尼伝説研究」(『東洋大学短期大学論集日本文学編』十八号)に示されたように、関東や中部を中心に、かなりひろい範囲にわたって、八百比丘尼に関する伝承を認めることができる。本書の「庚申の夜の客」に引かれたように、『新編会津風土記』の金川寺の項には、この八百

比丘尼という女が、九穴の貝を食べたように記されている。しかし、そのほかの多くの事例によると、同じ八百比丘尼という女は、人魚の肉を食べたものと伝えられている。さきの東方朔に関する伝承と、この八百比丘尼に関する伝承とが、たがいにとどのような関係をもっているのか、いっそう精細な検討を加えたいものである。

福田晃著『神道集説話の成立』

荒木博之

福田晃氏の『神道集説話の成立』はこれまでの福田氏の学問的業績を集大成した大著である。それに対して私ごととき浅学の者が書評をものするということは第一福田氏に対して失礼ではないか。書評の話がもちこまれたとき私はそのように考えた。私は神道集を綿密に読んだこともなければ、ましてや学問対象として取り組んだこともない。わずかに『昔話伝説研究』第七号に「甲賀三郎譚と熊のジョン」という拙い論

いずれにしても、この大著の刊行は、現在の時点において、日本の昔話の研究が、どのような段階に達したかを示すもので、民俗学の研究史の上でも、かなり大きな意味をもつものと思われる。

(おおしま たてひこ・東洋大学)
(A5判 七百十四頁 昭和五十九年七月
同朋舎出版 一万三千元)

文を書いたことがあるだけである。そのように申し上げて固辞したところ、書評は必ずしも内容全般に亘らなくてもかまわない。たとえば「諏訪縁起の成立」といったその一部に照明を当ててもらえば結構である、とのことで、ようやく筆を執る決心をした次第であった。もっとも、この大著の甲賀三郎譚に関するくだりは全七五四頁の本文のうち三七〇頁というほぼ半分に近い部分を占めている。福田氏が諏訪縁起の成

立と展開に如何に力を注いでいるかがわかるうというものである。

本書は第一編「原神道集の成立」、第二編「諏訪縁起の成立」、第三編「児持山縁起の成立」、第四編「上信地方縁起の生成」の四編から成っている。

福田晃氏の著書に接して常に驚嘆することとは、その資料博搜のエネルギーである。

まことに膨大かつ重厚な資料を一体どのようにして探し当てるのであろうか。私などの如き怠け者の、情報にうとい人間からするならばそれは想像を越えた熱意と規模において行なわれる。ただただ脱帽の他はない。

さて、当面の「諏訪縁起の成立」は、第一章「諏訪縁起・甲賀三郎譚の源流」——その話をめぐって——、第二章「甲賀三郎譚の管理者」(一)——甲賀三郎の後胤——、第三章「甲賀三郎譚の管理者」(二)——甲賀の唱門師、第四章「甲賀三郎譚の管理者」(三)——信州滋野氏と巫祝唱導——、第五章「諏訪縁起・甲賀三郎譚の原態」(一)——その巫祝祭文性をめぐって——、第六章「諏訪縁起・甲賀三郎譚の原態」(二)——甲賀三郎の後胤と蛇体信

仰——、第七章「諏訪縁起の成立と展開」——甲賀三郎譚の成長の七章から成っている。

まず第一章は「諏訪縁起・甲賀三郎譚の源流」——その話をめぐって——とあるように、諏訪縁起・甲賀三郎譚の源流を探し求めようとする作業である。柳田国男が甲賀三郎譚の原話に近接するものとして昔話「奏良梨採り」をあげたのは周知のことであるが、福田氏はこれに対してAT三〇一の「熊のジョン」「熊のファン」をその原話として比定している。これは必ずしも福田氏の創見ではなく、福田氏自身も言及しているように、我が国においては関敬吾氏、三原幸久氏、そして筆者も既にその立場をとっているものであるが、そのことに最も早く注目したのはインディアナ大学教授であった故R・M・ドーンソンであった。ドーンソンは、一九六二年に出された *The Legends of Japan*, Charles E. Tuttle, Tokyo (日本の伝説、チャールズEタトル商会、東京) において信州の甲賀三郎伝説を紹介し、その解説においてこの話が熊のジョン(AT三〇一)の類話であること論じている。

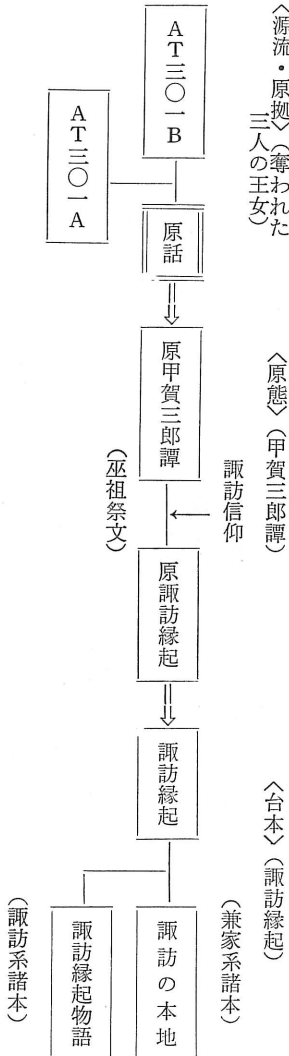
ところで甲賀三郎譚の源流について考察しようとする場合「神道集」の「諏訪縁起事」を最古の文献とする諏方系と、石川タモ氏蔵「諏訪御由来絵縁起」を最古の文献とする兼家系のテキストのいずれがより源流に近いものであるかという問題が当面解明すべき宿題として我われの前にあるのは当然である。

柳田国男はこの点について、両者の異同を信仰系統の差に求め「甲から運んで来て乙で手を加へたもの(諏方系)」が「もう一度もとの甲地へ送り返されて新たな形で行はれて居る(兼家系)」と説いて、諏方系がより古く、兼家系がより新しいとした。これに対して近年、兼家系の諸本が相次いで発見されるにつれて松本隆信、金井典美氏などによって兼家系の方がより古態を伝えているとして柳田国男と正反対の議論が出された。また、福田氏の言及するところとはならなかったが、荒木も「甲賀三郎と熊のジョン」なる論文の註において兼家系の伝承がより古いことを論じている。

これに対して福田氏はAT三〇一の内外の資料を駆使しながら、春日姫の誘拐・失踪

をモチーフとする諏方系の話型は「王女の失踪」をいうAT三〇一Aに属するものと

し、これに対して主人公の「超自然的出生」が主張され、それを証するが如くに魔王退治による王女の救出という展開を見せる兼家系の話型は三〇一Bに属すると主張する。さらに福田氏は中国などアジアの諸類話を傍証に引用しながら兼家系の「諏訪の本地」の話型がおよそAT三〇一B・三〇〇(竜退治)の複合型に近く、諏方系の「諏訪縁起物語」のそれがAT三〇一A・五五五「漁師とその女房(竜宮訪問)」の複合型と判じられるとし、甲賀三郎譚の展開について次のような図式を提示するのであ



る。

すなわち福田氏は諏方系の「諏訪縁起物語」よりは、兼家系の「諏訪の本地」がいちだんと原話に近いと推定するが、両系統の先後関係は必ずしも断定されるべきではないと結論づけている。

以上の福田氏の議論は多くの傾聴すべきものを含んでいるが、歴史地理的方法がプロトタイプとは何かという問題に対する解答を明示し得なかったことがその衰退の一原因となったように、プロトタイプすなわち原型とは何かという概念規定を明らかにすることが今後の課題であるといえよう。第二章から第四章までは、甲賀三郎譚の

管理者についての精緻な論考である。こ

でも福田氏は甲賀望月氏系図、望月惣左衛門家所蔵系図、望月保家所蔵系図及び古文書、医王山慶円寺所蔵系図及び古文書、矢川神社旧蔵「甲賀由緒概史略」「伊水温古」「政国拾遺」、水口神社文書、「鉄道大明神縁起」、信州滋野氏三家系図、望月滋野景図、「駿国雜誌」など膨大なる資料を博搜し、これに伴う度重る現地調査によって初めて甲賀三郎譚の管理者の全貌の鳥瞰図を明瞭に画いて見せた。福田氏によれば、甲賀には甲賀三郎の裔を言いたる陰陽師系の巫祝の徒があった。彼等は卜占、祈禱、配札、売薬、医療などに従事しながら甲賀三郎譚

を持ち歩いたのである。そして望月家の系図が語る如く彼等の一部は信州滋野望月氏の移住したものであるが、これら信州から辿りついた一派が甲賀の地に同じ仲間を見出し、自らのグループに彼等を引き込んだ。それが甲賀三郎の後胤という人びとであったと福田氏はいう。

福田氏はさらに第五章において諏訪縁起・甲賀三郎譚はその構造に於て奄美のユタ、韓国のムーダンの祭文、宍岐のイチジヨウ、イザナギ流ハカセの祭文などの構造と同じく、大林太良氏などのいう裏返し反覆の二分構造をもっていることに説き及ぶ。ここにも福田氏のゆるぎなき実証的方法と同居する学問的関心の射程の広さを見ることができよう。

さらに福田氏は第五章において甲賀三郎譚に特徴的な蛇体変身のモチーフに触れ、それはひっきょう蛇体を神に祀る日本人の民族観念を背景とした蛇身を祀る巫現集団の思想に基づくものとする。傾聴に価する考え方であるがこれについてはまた別な解釈が可能なのではないだろうか。

私は「甲賀三郎譚と熊のジョン」におい

て、甲賀三郎譚を「熊のジョン」の一類話と比定した場合、二つの大きな日本的特徴があることを論じた。その一は福田氏も言及している地下滞留の時間の異常な長さであり、もうひとつは、他の国の「熊のジョン」説話に見ることのできない神↓神（清↓穢↓清）という円環構造である。この二つの重要な特色は、甲賀三郎譚が死↓再生のイニシエーションのシンボルとして使われていたことを意味している。甲賀三郎の歩いた地下のきわめて長い道程は死か

ら再生に至るイニシエーションの道であった。そして、もしこの仮説が許されるならば、地下遍歴を経た甲賀三郎が蛇体として現われるのはまことに自然である。すなわち蛇はその脱皮の習性と強靱な生命力によって多くの文化において再生のシンボルとしてとらえられているからである。果して、甲賀三郎は蛇体をぬぎ棄てることによつて元の貴種として再生し、やがて神として示現することになるのである。この点についての福田氏の御意見を是非聞きたいと思っている。

(あらしき ひろゆき・広島大学)

(A5判 七百七十八頁 昭和五十九年五月 三弥井書店 一万五千元)